

議会

No.258



議会に対するご意見
をお聞かせください。

電話

☎0269(82)3111
(内線170)

E-mail

gikai@vill.kijimadaira.lg.jp

発行：木島平村議会
編集：議会だより編集委員会

議会国内視察研修

(11月6日～7日)

今年度は、県内南信の宮田村・泰阜村ほか、数か所を視察しました。

議会だよりでは、湯本行浩議員・山本隆樹議員の報告書を抜粋・編集し、掲載します。

なお、視察や各種研修会の報告書は、議会事務局で保管しており、どなたでもご覧いただけます。

【上伊那郡宮田村】

みやだむら

湯本 行浩

長野県の南部に位置し、南アルプスと中央アルプスに挟まれた自然豊かな村。降雪は少なく、晴天率の高い地域、暮らしやすい気候。人口は約8800人。生活圏半径約2kmの非常にコンパクトな村。

◆移住対策◆

「田舎暮らしの本（宝島社）2021年版住みたい田舎ベストランキング」全国1位。20代から50代位の方が多くを占めている。近年の傾向として、セカンドライ

フ的なシニア世代が増え、関東圏から関西圏へシフトしている。

移住する決め手として考えられることは「時間をかけて説明し、多くの不安を解消し、いかに移住希望者に寄り添えるか」ということ。



宮田村役場にて

移住者の新規就農者の受入れも積極的に行っている。「宮田方式」という独自の土地管理制度を採用しているため、宮田村には、耕作放棄地がない。

「宮田方式」とは、村を一つの農場と考え、村全体の農地利用計画を作成し、村が土地所有者に

地代を払って農地の利用権を得て、それを就農者へ貸し出す仕組み。村が間に入って不動産業の役割を果たすため、土地を探して新規就農を希望する人にとっては非常に参入しやすい。

◆日本一をめざす子育て支援◆

宮田村では、子育て日本一の村をめざし、充実した支援策がある。施設面では、0歳から18歳までの子供と保護者が利用できる「子育て支援センターうめっこらんど」があり、同年齢、異年齢の子供達、保護者が集い、育ち育てあう場所。保護者同士が顔を合わせること、子育てに関する情報交換の場にもなっている。

また、1歳児から3歳未満児専用保育園「こども保育園」は、行事に左右されず、独自のペースで保育できることがメリットで、3歳以上児保育園にも隣接している。保育園のお兄さんお姉さんとも遊ぶことができる。デイサービスセンターも隣接している。

で、高齢者との交流もでき、少子化、核家族化が進む社会情勢の中、世代を超えた交流を大切にしたいと感じる。



うめっこらんど内 遊ゆう広場

保育園、小学校、中学校では、地元の食材を使った給食も自慢の一つ。食物アレルギーにもきめ細やかに対応。給食で使う食材については「宮田村学校給食を育てる会」が中心となり、食材の確保から納入までを行っている。

木島平村でも固定観念にとらわれず、良い施策は、取り入れていければと感じる視察研修であった。

【下伊那郡泰阜村】

山本 隆樹

「福祉の村」として在宅福祉に力を入れ、また「山村留学」にも30年以上前から取り組んでいる泰阜村を視察した。

国道も信号もコンビニもない「なにもない中」で、自然と共生し、ないものは作り、知恵を出し、協働の精神を育んでいる村だと感じた。

泰阜村ってどんなトコ？

長野県南部に位置する人口約1600人の農村。総面積64・59^{km}のうち86%を山林が占める。居住地の標高は、天竜川沿いの320mから役場周辺の770mまで高低差があるため、植生が豊かである。天竜川の東岸にしがみつくように約700戸の家々が点在し、高齢者が42%（2020年65歳以上）を占めている。

◆別名「福祉の村」◆

泰阜村は30年以上前から「在宅福祉」に力を入れている。昭和60年代初め、軽トラックに風呂桶を積んでの「在宅入浴」が最初で、その後、泰阜村を築いてきた全ての人たちが安心して泰阜村で老い、最期を迎えられるよう、在宅福祉に力を入れ、手厚い福祉施策で生活をサポートしてきている。

◎泰阜村の福祉施設

①介護予防拠点施設「あさぎり館」

障害を持った方こそ、介護予防が必要であり、行動範囲も交際範囲も狭くならないよう「精神的な支えになる場所」として設置され、温浴施設も備えている。

現在、元気な方、地域の方にも十分活用され、社協による「生きがいデイサービス」（介護予防）を中心とした地域サービスや福祉ボランティア活動の拠点施設として、誰でも気軽に立ち寄れる憩いの場となっている。

②高齢者支援ハウス「やすらぎの家」

やすらぎの家は「介護施設」ではなく、高齢者の方々が病気や不安などの理由、または家族の状況により、自宅での生活を継続できない場合に利用できる住居である。住み慣れた「我が家」が基本だが、限りなく自宅に近い終の棲家（住居）その結論が「高齢者支援ハウス」やすらぎの家とのこと。在宅福祉、在宅医療を続けてきた延長線上にある「ケア付き高齢者住宅」が、在宅福祉推進の一つのあり方を示していると感じた。

◎視察を通して思うこと

課題として、介護保険制度施行以降、施設利用志向が高まり、それに伴い、介護保険料が上がって

きている。要介護者の年代層が上がり、同時に高齢者を取り巻く家族の年代層や環境が変化したこと（老々介護や核家族化・若年層の転出など）が挙げられる。自宅介護することは大変なことだが、できるだけ住み慣れた我が家で最期を迎えられることが理想である。

木島平村も地域福祉事業に積極的に支えられている。視察を通して在宅福祉の理想と現実を垣間見ることができた。みんな支えあひ、笑顔で暮らせる在宅福祉のあり方を探っていきたい。



やすらぎの家 外観 (上)
居室 (下)

◆山村留学の拠点◆

全国から、親元を離れた小中学生が集まり、協働生活を行っている。

長期キャンプをきっかけに、昭和61年から山村留学を始め35年超、巣立った子供は約600名。

◎一年間村の子になる

「暮らしの学校だいたらぼっち」NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターが運営する民間施設で、スタッフと子供たちが共同生活を送っている。

全国から集まった18名の小中学生が一年間（更新あり）泰阜村に移り住み、村の学校に通いながら協働生活をしている。

◎日々の暮らしを教材に

毎日の食事や掃除、洗濯はもちろん、薪割りや田んぼ、畑の作業なども子供たちが行い、暮らしの全ては子供たちの話し合いで決める。「毎日の暮らし」の中に学びの原点があり、ここでの生活で子供たちは、生きるための土台となる「根っこ」を育んでいる。

◎「村と生み出した新たな教育」

保育園の野外保育活動・学童保育の受託・都市部の若者と村民と一緒に学び育つ大学生受入事業など、村との連携も積極的に行っている。



子供たちが生活する母屋